雑木林と共存する集合住宅—東久留米「子育ての街」—

A Study of the Housing Development Coexisting with a Natural Scrub—A Town for Raising Children in Higasikurume—

大屋貴代子* *kiyoko OYA* 宮下 公夫** *kimio MIYASHITA*

1. 子育てをめぐる住環境整備

東久留米「子育ての街」は、約1haの農地を市街化開発し、1995年10月に完成した全57戸の賃貸住宅団地（都民住宅）である。

この計画に着手した92年当時は、バブル経済下での不動産投機の加熱に伴う地価の高騰や家賃の上昇の影響が強く残り、都市部における住宅事情は著しく悪化し、とりわけファミリー世帯向け賃貸住宅ストックは質・量ともに低下する一方、出生率の低下による少子化が進むなど、子育てを巡る環境の悪化が社会問題となっていた。

そうした中で都心から電車で30分弱という距離にありながら、まるで時代から取り残されたように田園風景の広がる計画地周辺は、雑木林や保全緑地、野火止用水、遺跡公園に囲まれた子供の遊び場に事欠かない豊かな自然に恵まれ、小児科の総合病院や療養所等の医療機関も数多いなど子育てに適した環境にあった。

このような社会背景や周辺環境、そして計画地の用途地域が第一種住居専用地域（建蔽率30%、容積率60%）であることから、住戸を2階建テラスハウス形式とした建築基準法第86条による一団地開発を行ない、外部緑地環境に重点を置いた若いファミリー世代を対象とする「子育て」をテーマとした住環境整備の基本計画を行った。

親が安心して子供を産み、育てられる環境。子供が心身共に健康かつ安全に成長し、豊かな感性を育む環境。

とはいえ、環境設計において子供向けの施設や遊具の数や種類等のメニューを揃えるといった表面的な「子育て」状況整備に終始するだけでは、かえって子供達の創造性や活動を限定することに他ならないのではないだろうか。

むしろもっと単純素朴に緑や生き物がありのままに身近に存在するワイルドでラフな自然を体感し得る地域特有の風景や自然環境の保全に努めるべきではないだろうか。

そうした観点から、人間形成の原点としての住環境にこの地域の原風景である雑木林を取り込み、自然と生活との共存を意図した緑化計画に重点を置いた。

2. 地域の原風景としての『武蔵野』

— 昔の武蔵野は萱原のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といってもよい。
— 林と野がかくもよく入り乱れて、生活と自然がこのように密接している処がどこにあるか。実に武蔵野にかかる特殊の路があるのはこのゆえである。

今からちょうど百年前に発表された国木田独歩の小説、『武蔵野』（1898）に描かれた武蔵野の姿である。

この作品は、それまでの風景の美学にはなかった武蔵野の美を発見し、広めたもので、この地を語るときの常套ともなっている。武蔵野といえば雑木林。自然と共存する生活。それは、地域のランドスケープとしてあまりにも有名であるにもかかわらず、今では市街化の波にさらわれて、僅かに地方自治体の保存樹林に名残りを留めるばかりになってしまった。その残された一画にこの住宅は位置している。

南東の二方向を東京都の保全緑地に隣接するこの場所は、独歩の描いた武蔵野の面影を色濃く残している。

3. 雑木林と共存する生活 緑化計画

緑化計画におけるコンセプトは、隣接した雑木林を敷地のなかに取り込み、生活空間に融合させることである。

これは恵まれた立地特性を活かし、失われつつある原風景を取り戻す試みでもある。それは、断絶された標本化した雑木林と小規模開発住宅地群との緑地環境を結ぶ緩衝帯として、周辺に地域のランドスケープに対する共有意識、参加意識を呼び覚ますインパクトを与えることにも繋がるのではないだろうか。

図-1は敷地周辺の緑地環境を示したものである。敷地は北西を住宅地に、南東を雑木林に接している。そして周辺境界道路は、東京都環境保全局が散在する保全緑地をネットワーク化した「雑木林のみち～小山・金山コース～」に指定されている。この「雑木林のみち」を緑化のシンボルとして敷地の中央を西から東の雑木林へ抜ける緑の連なりを設定し、公道によって隔てられた各街区を結びつけると同時に、周辺地域にも開放された遊歩道とした。

*フリープランナー **多摩中央ミサワホーム(株)

やがて続く本物の雑木林へのプロローグとなるこの遊歩道の中央には、コミュニティセンターを配置し、緑を通じた地域活動の拠点とした。

また、南北方向の緑のつながりを確保するために東久留米市への提供公園を南端の雑木林との境界部に配置した。こうした基本的な緑の配置をもとに、雑木林の特徴を取り込む手法として、この場所自体を一つの雑木林であると仮定してみることにした。最初は一つの雑木林であったこの場所に、やがて道路が通じて5つのブロックに寸断され、小さな林となり、少しずつ住宅が建ちはじめたというストーリーである。すると接道部や生活動線にあたるところ（周辺部）は整備され、奥のほう（中心部）にはまだひらかれていない雑木林が残されているという設定ができる。（図-2）

このストーリーと基本構造によって、用途の違う動線に即した7つの植栽エリアを分類した。なお高木層はすべてクヌギ、コナラ、エゴ、イヌシデなどの雑木で構成する。

I. 雑木林のみち

緑化のシンボルとなる植栽。内部に残された以前からあった雑木林という設定。林床はコグマザサを主体にした裸地の目立つ植栽。

II. 接道緑地

雑木林の周辺部を模した植栽。林床を常緑灌木を主体にした混植で植えつづいた柔らかな境界を構成する外殻の植栽。

III. バックパス

各住戸にアプローチする生活機能動線。花壇状に仕切られた花の多い明るく整備された植栽。

IV. こどものみち

砂場、専用庭、住棟間の路地と雑木林のみちを鎖ぎ敷地全体を回遊できる小道。果樹やワイルドフラワーを用いた遊びのための植栽。

V. 専用庭

各住戸に付属するプライベートな緑地

VI. 緑化フェンス

民境界を示し、緑視率を高める植栽。

VII. 駐車場

緑化ブロック、芝目地など緑量を増やす植栽。

この7つの緑のエリアは生活動線と重なり、相互に関連しながら居住者の専用庭から大きな庭となる敷地全体の共用地域へと広がり、一つのコミュニティグリーンを形成する。こうした緑の連続性を仕掛けることが、地域のランドスケープを充実させるきっかけになるのではないだろうか。

4. 東久留米「子育ての街」緑化協定

また、敷地に限定された局所的緑化にとどまらず、周辺地域の緑のつながりを強化するため、行政への働きかけも積極的に行なった。

□武蔵野の雑木林の面影を子供達の世代に継承すること。

□子育てに適した情緒豊かな緑あふれる良好な住環境の創出及び維持・管理を図ること。

この2点を目的に「東京における自然の保護と回復に関する条例」第26条に基づき『東久留米「子育ての街」緑化協定』を締結し、東京都知事の認可を得ることにより計画緑地の公共性を確保した。そのうえで保全緑地や雑木林のみちを管轄する東京都環境保全局と折衝を行ない、それらの一部として本計画の提供公園や遊歩道を位置付けることによって公的バックアップ（※東京都公園協会より緑化基金の助成、東京都労働経済局より苗木の供給）を受けると同時に地域の緑地の一画としての認知を確保した。

当初は、行政側がこの種の民間事業の設計者からのアプローチに慣れないこともあり、私たちの計画意図が受け入れられるまでにはかなりの時間がかかったが、地域の緑を保全するためには、もう少し柔軟な官民共同参画体制が必要なのではないだろうか？というのが正直なところである。

5. 緑との共生とコミュニティ

ところで計画当時における最大の難問は、緑地の維持管理に関する問題だった。大半の樹種が落葉樹で構成される雑木林を生活空間に取り込むということは、同時に落葉や

図-1 周辺の緑地環境と遊歩道

図-2 緑化ストーリー

昆虫、雑草等をも取り込むことに他ならない。通常では苦情の発生源にでしかなくこうした緑化計画が住人の理解や支持を得られるのであろうか。自然と生活の共存とは、原理的に自然と人工との対立をはらむものであり、その実現のためには住人自身の一定の意思の努力を伴わなければならない。しかし賃貸住宅であるがゆえに計画段階では実際の住人の顔を見ることができない。かといってあらかじめ禁止事項を用意して住人に押し付けては、緑地の存在そのものが負担になりかねない。

結局、緑地の維持管理については、私たち計画者が居住者に対する計画内容の十分な説明と啓蒙活動を行なうと同時に住民コミュニティ形成の働きかけをし、環境意識を高め、実生活上の経験を踏まえた上でコミュニティとの対話を通じて模索していくという方針をとることになった。

そのきっかけとして入居直後に説明会を開き、その席上で強い興味を示した何人かの入居者との個人的なコンタクトを取り、彼等を核とした自治会を組織するよう誘導した。その他の住人も就学前の乳幼児を持つ家庭が8割を占めることから地域環境に関心が高く、計画への支持賛同の声も高かった。早速、子供会も組織され餅つき大会や納涼大会、花火大会等の行事も催された。心配された落ち葉や雑草は、樹木が植栽時の剪定からの回復期にあったため簡単な定期清掃で済み、順調に経過していた。

ところが、完成から3年目の夏、コナラに小指大のオレンジと黒の縞模様の毛虫が大発生し問題を引き起こした。これに生理的嫌悪感を募らせた一住人から薬剤散布による駆除を執拗に要求され、とうとう業者を派遣したところ、周囲の住民が子供が遊ぶ木や草に薬剤を散布するのは安全上問題があるし、かぶとむしも死んでしまう、虫がいなければ鳥も来ないではないか、それでは自然と共存する子育ての街ではなくなってしまうと作業を中止させてしまったのである。また後日、別のブロックの子供がその毛虫にアレルギーを起こし、業を煮やした両親が住戸まわりの樹木

を伐採してしまうという事態が起こった。

これは、居住者に計画意図が理解されているという私たちの認識を改めさせられた出来事であった。

そこで、対応策を考える集会を住民と管理者と私たち計画者の間で開いた。緑と共生していく手法を探る集会である。より具体的に薬剤を使用しない手作業による病害虫駆除の方法や、樹木の成長による日照の影響など生活や健康に支障を与える問題を議論した。

その結果、居住者は“緑のパトロール”を実施し、樹木の状態を管理者に伝える役割を担い、管理者は、造園業者と共に適切な対処を行なう。そして計画者は居住者と管理者の間にあって有効な対処方法を提示する。また、居住者の要望を把握するため“緑のポスト”を設置し意見交換をする手段を設けるなど緑地の管理体制を整備し、一連の活動をスタートさせた。

このような一つの事件をきっかけに住民の環境整備への参加意識は高まり、以前よりコミュニティの親密度は増したようにも思える。そして緑に包まれた住環境の中で生活する喜びが共通意識として浸透する結果になったと思う。

こうした緑を通じたコミュニティの中で、子供達や親達は実にのびのびと生活している。夏には、雑木林のみに大型のビニールプールを広げ、真裸で水遊びや日光浴をする子供達の姿も見られる。庭先でかぶとむしやくわがたが採れたといって喜ぶ家族もある。当初は団地の建設に反対していた近隣住民も遊歩道を散歩に訪れる。

人が集って住む事により初めて得られる緑豊かな居住空間は、居住者と共に地域に受け入れられていく。

そして緑と共生する住民意識は敷地の中に留まらず、緑のネットワークとして周辺地域に対しても影響を与え、よりよい地域のランドスケープを形成するであろう。

樹木の成長と共に周辺住民も含めた形で成長していくこの緑のコミュニティの未来を私たちはこれからも見つめつづけていきたい。

写真-1, 2 コモンスペース(左) フラワーバスケットによる緑化活動を行なう住人(右)